

平成18年3月20日
第7回気象分科会資料

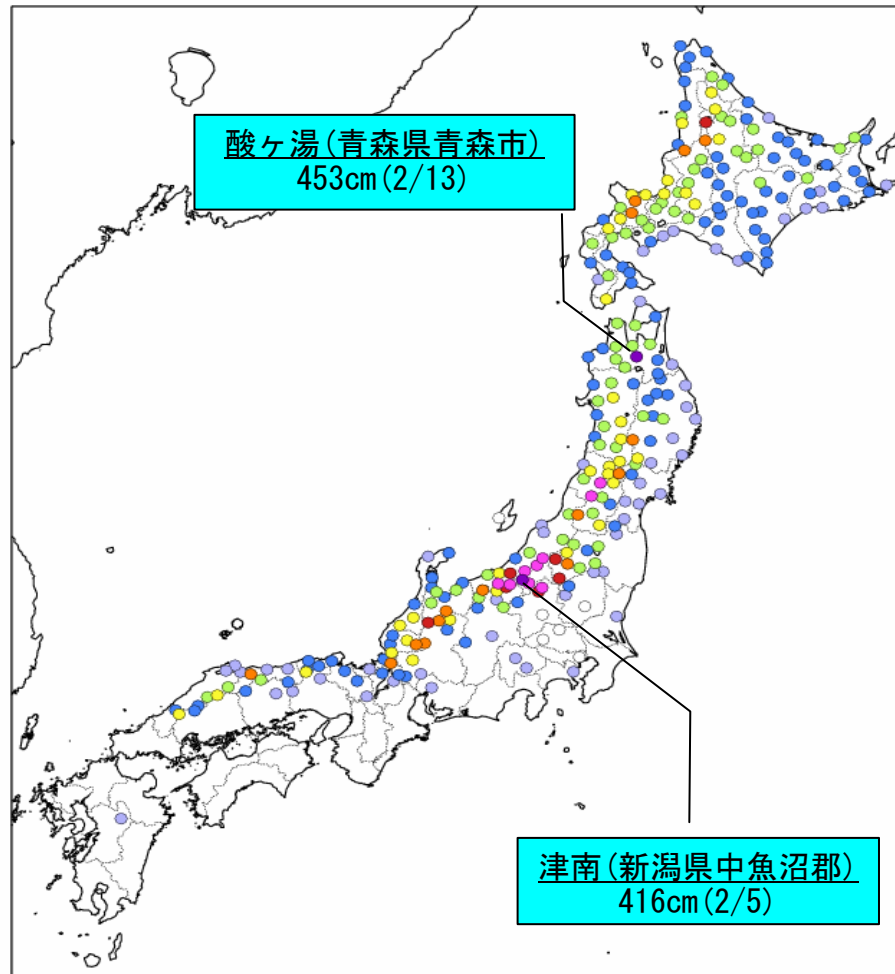
今冬の大雪について

気 象 庁

今冬の大雪の状況1

～ 多くの地点で積雪の記録更新 ～

平成17年12月～18年2月の各地の最深積雪



積雪計を設置している官署及びアメダスの記録を地図上に表示。
単位はcm。

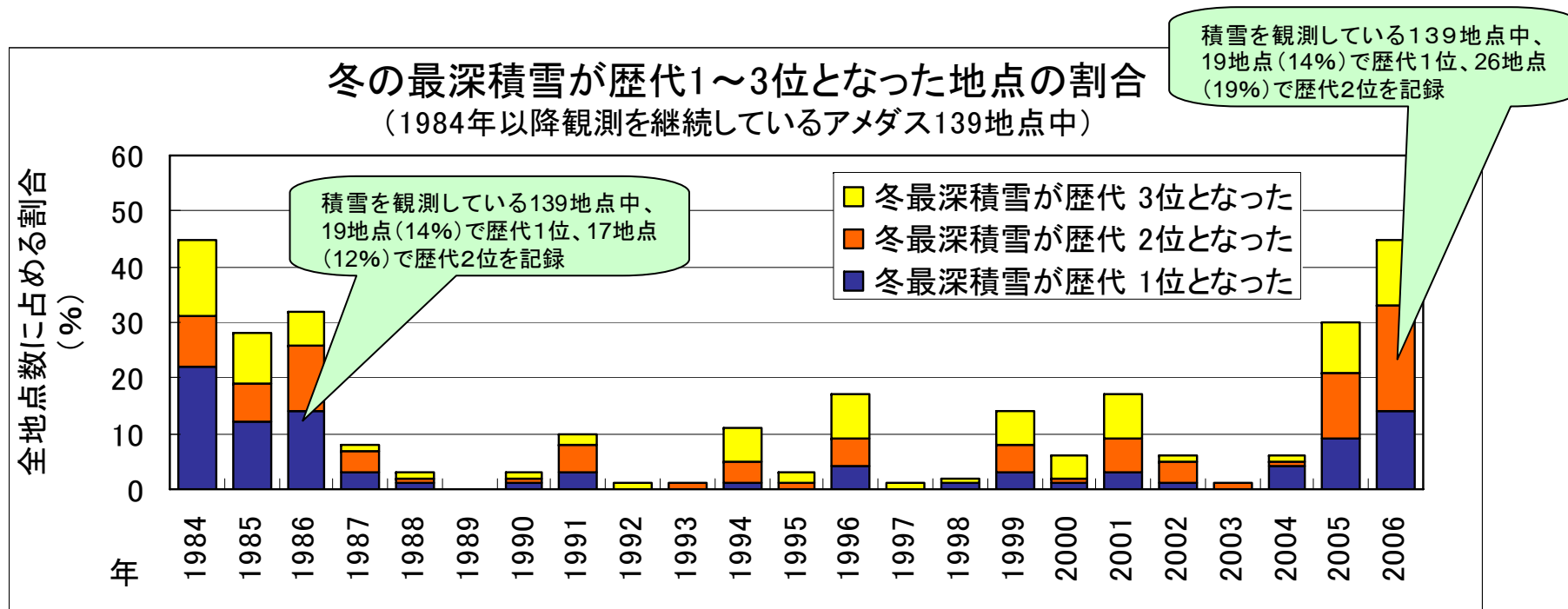
- ・12月から1月上旬にかけて、非常に強い寒気が日本付近に断続的に流入し、12月としては記録的な大雪。
- ・1月中旬以降も、日本海側山沿いを中心にたびたび大雪。



- ・20年ぶりの大雪となり、全国二か所(青森県青森市酸ヶ湯、新潟県中魚沼郡津南町)で4m超の積雪を記録。
- ・雪下ろし中の事故等甚大な人的被害。

今冬の大雪の状況2

～ 最深積雪が歴代1～3位となった地点の割合の推移 ～

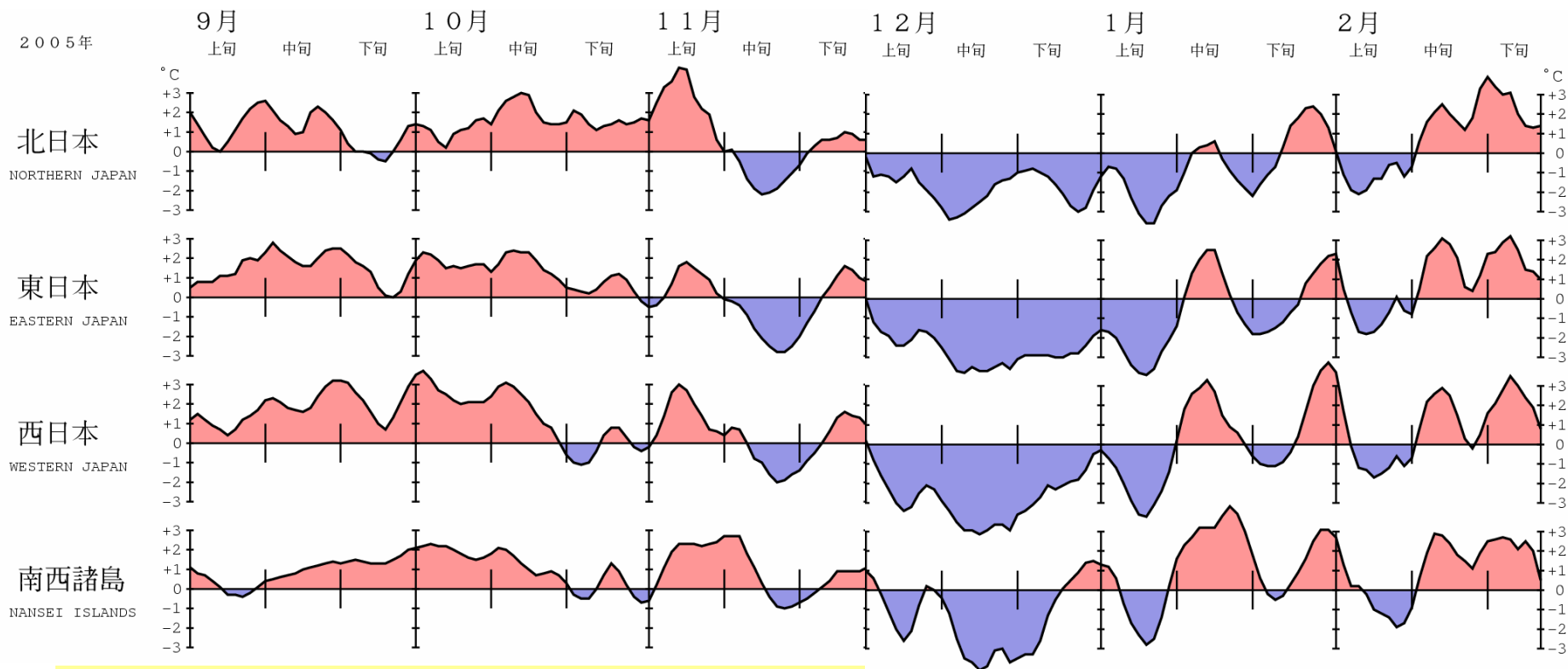


最深積雪が1位及び2位の記録を更新した地点は全体の30%を超え、1984～1986年以来20年ぶりの大雪となった。

気温の経過(平成17年9月～平成18年2月)

～ 冬平均気温は北・東・西日本で低温 ～

気温の平年値からの差



・1月上旬まで非常に強い寒気が入り極端な低温傾向。

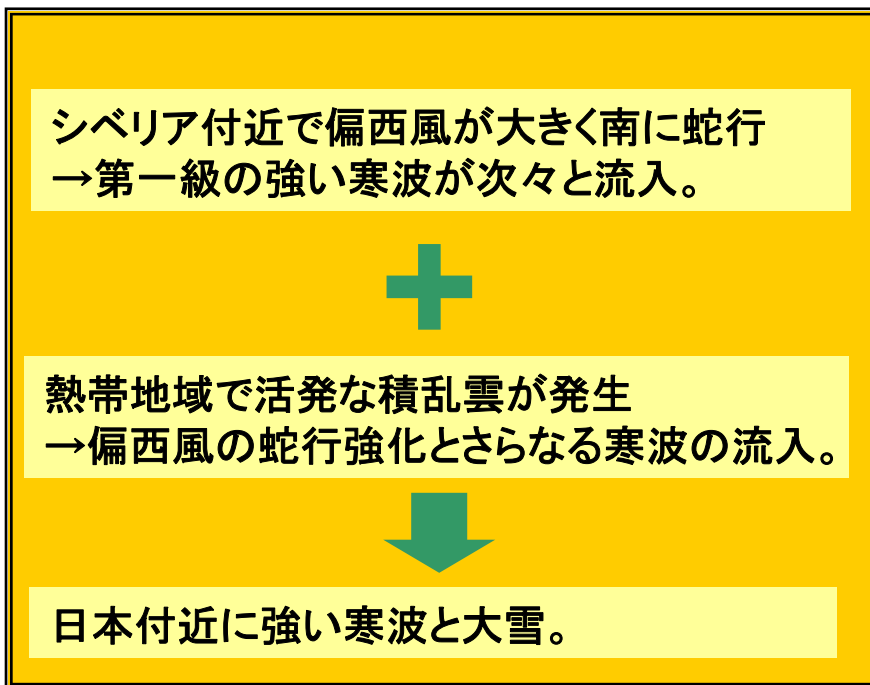
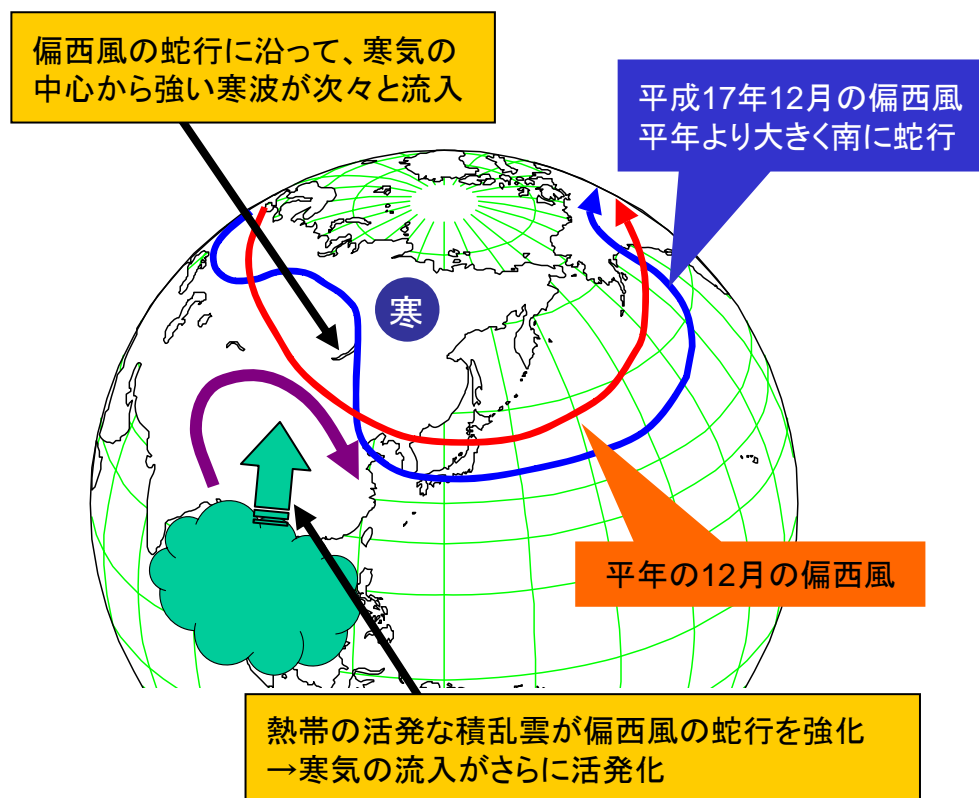
特に12月は全国的に20年ぶりの記録的な低温となり、東・西日本では1946年以降の最低記録を更新。

・1月中旬以降は暖かい時期と寒い時期が繰り返され、気温の変動が大きかったものの、西日本以西を中心に次第に気温の高い日が多くなった。

・冬期間(12月～2月)の平均気温は、北・東・西日本で低温、南西諸島は平年並となった。

昨年12月の低温と大雪の原因

～ 偏西風の蛇行と熱帯の活発な対流活動 ～



平成17年12月の大気の流れの特徴

「平成18年豪雪」

気象庁は、平成18年の冬（平成17年12月～平成18年2月）に発生した大雪について、平成18年3月1日「平成18年豪雪」と命名。

20年ぶりの大雪に伴う広範な被害（特徴）：

- ① 屋根の雪下ろし、除雪作業中の事故等により、死者・行方不明者139名（2月28日現在、消防庁調べ）。
- ② 雪下ろし等作業中の犠牲者（全体の約3/4）や、高齢の犠牲者（全体の約2/3）の割合が高い。
- ③ 山間部の村落の孤立化、都市部を中心にした大規模な停電、鉄道や航空等の交通機関への影響が繰り返し発生。



- ・今冬の大雪に関する様々な経験や貴重な教訓を今後に伝えることをねらいとして命名。
- ・大雪に対する命名としては、「昭和38年1月豪雪」（三八豪雪）以来43年ぶり。

顕著な災害を起こした自然現象に対する 命名の考え方及び名称の付け方

豪雪

命名の考え方

1. 10年から数十年に一度の大雪(降雪・積雪)となった場合
2. 被害が顕著となった場合
3. 上記1. 及び2. の状況を検討して、命名する

名称の付け方

原則として冬期間全体を通した命名とする(必要であれば、月を限定すること及び地域名を付した名前とすること)

豪雨

命名の考え方

1. 顕著な被害(損壊家屋等1,000棟程度以上、浸水家屋10,000棟程度以上など)が起きた場合

名称の付け方

豪雨災害の場合は被害が広域にわたる場合が多いので、あらかじめ画一的に名称の付け方を定めることが難しいことから、被害の広がり等に応じてその都度適切に判断している

参考

地震

命名の考え方

1. 地震の規模が大きい場合
 - 陸域: M7.0以上(深さ100km以浅)かつ最大震度5弱以上
 - 海域: M7.5以上(深さ100km以浅)、かつ、最大震度5弱以上または津波2m以上
2. 顕著な被害(全壊100棟程度以上など)が起きた場合
3. 群発地震で被害が大きかった場合等

名称の付け方

原則として、「元号(西暦年)+地震情報に用いる地域名+地震」

参考